大和名所記

第十二 高上郡

2906
572

ル 4
4873
9

2906
572
4292

昭和
號 1873
卷 9

思永館

和州舊跡圖考

第十二卷葛上郡

葛城

葛城山付花龍○麟角○四足鶏事

金剛山付法起菩薩○七大童子○開山堂の夏

一言主神社付神階夏○高天山付高天寺夏

高天彦神

白鳥陵付白鳥飼事○化鹿山夏

琴弾山

高宮廟

高宜宮

葛城寺付弥勒夏

38- 0066

室秋津嶋宮
玉手丘上陵
掖上池心宮
掖上嘆間岳
捨篠社
巨勢山
とあさゞ森
于菓屋城
宍師の社

第十三卷城上郡

掖上池
葺原村
孝昭天皇陵
雲櫛社
御年神の社 神階夏
巨勢川
菅原伏見
延喜式神名帳
案神天皇陵

景行天皇陵
田村皇女墓
忍坂山
釜口寺
痛足山
緒環墓
殊城山
卷向川
纒向日代宮
豐受氣大明神の御鎮座地

舒明天皇陵
大伴皇女の墓
鏡女王墓
痛背川
箸墓
纒向珠城宮
纒向山
檜原

三輪山
神山
神辺山
ちりの杖
杖社
大御輪寺 付 神足跡事
玄敏谷
三輪崎
磯城嶋金刺宮
磯城鴻

神岳山
三垣山
三輪川
三輪神社
三輪若宮
天照大神の御鎮座地
海柘榴市
佐野渡
磯城瑞籬宮
磯城鴻高園

泊瀬山
木綿宮
泊瀬川
宮山
石村山
長谷寺 付 観音○石座の事○登廊○炎上の事
犢法善神
山口の神社
別院長勝寺
安艮院

泊瀬
紅葉宮
石川野辺 付 二本杖事
弓月嶽
白山の椿現
与喜山天神社 付 祭事
蓮花院
藤井坊

道明上人廟　泊瀬朝倉宮
泊瀬列城宮　泊瀬齋宮
迹驚淵　泊瀬小野
伊豆加志本社　天照太神宮の御鎮座の事
狭井神社　笠山
竹林寺　付荒神宮　延喜式神名帳

和州舊跡攷芳十二巻葛上郡

葛城

葛城ハ神武天皇二年高尾張邑旧支紀ヨ高城邑
ヨ出物あり男ハ短くして兵勇い
さ先り宮軍ゝ作ゝ乃細をして敵ヲ殺ゝ
是ゝり葛城ノ名あり　日本紀

葛城山

金剛山同山異名

万葉
吉野のゝ紀山ゝ雲ハ立てもゝ隠てぞ思ふ人丸
夏家百首
吳竹しそ迷ともゝんゝ葛城の花ゝ色ゝ雲
協川三百首
ゝゝゝゝ本法ゝ光ゝる稲妻山伏のゝ列ゝ雲ゝ人道　兼昌
廣田寄合
葛城や夏の来ゝ志のさゝ入ゝ初ゝ雲ゝ　後鳥羽院
山集
ゝゝゝゝ葛城山の月晴ゝ行く彼ゝ　後白羽院

▲被明天皇元年六月移りて屋蓋をかけるを見
あり貌唐人に似て青紫あざやかなる衣を着たり
げらきの嶽より出て生駒山に地行年の時は
役者の松葉の如くなり西に向ひて延喜 日本紀
▲天武天皇九年二月葛城山に鹿角あり角の
もとは二枝なりて末合て完あり完の上に毛生
りもみもさしすれ是をまりけるなり 日本紀
御宇白鳳十三年葛城より西見の鶴河の利 日本紀
金剛山
金剛山は天瓊矛の沼と云ふ山名のこゝろ
沼とは山名のこゝろ
若は金剛峯又は縛曰羅獨鈷又は一峯峯 南記 又
は神祇宝山又は大日本日宮見国と云ふ是は日神

所化より出名あり 葛城山記 空
花厳経曰東北海中有處名金剛山從昔已来
諸菩薩衆於中止住現有菩薩名曰法起与
其眷屬諸菩薩衆千二百人俱常其中而演
説法云云 是大和国の金剛山なり 正統紀
▲本堂は法起菩薩不動明王蔵王権現の三尊
小角仙を祭りとなり正月三ヶ日大峯八大金剛
童子に供物をそなへ人夫葛城心覚と云ふをとなへあり
役行者の行法涌現の十人童子の八大金剛童
子は大峯に初し七大童子は八大金剛童
也先鋒一鬼護童子は一宗嶽又は二福集童子は
大鶴山又は三常行童子は金剛山又は四集飯童子
は二上の岩屋又は五宿着童子は紅宿又は六福来

童子ハ殺若嶽又身七羅綱童子ハ釈迦留岳よ志
げまり給ふとなり 国抄 答
▲開山堂役行者の遺像あり六月七日より法華
を修し一切月議摩堂より柴燈の護摩あり役行
者の像ハ茅野郡の大峯の石あらはれ又本堂
より御ぞうの坂中より朝原寺石寺あり

一言主神

葛木坐一言主神社 延喜式 一言主神ハ元薩埵王と
号す 一言 社記 主 葛城の神とも云ふ是あり抑一言主神ハ
一説に大穴穴道命の子味鉏高彦根命 釈日本記 雄略天
皇四年天皇葛城山に狩し給ふ時一言主神あり
天皇と宮を並べ輦を連ねて御狩し給ふ
月本紀 古支記 天皇大瞋給ふて神を土佐の国に流し給ふ

そのあと天平寶字八年従五位上高賀茂朝臣壽
麻呂して葛城山の東下高宮岩上に鎮む
釈日本紀 土佐国に流し給ふ義ハ信用せざるに因
説伝れども院徳日本紀にそのあらハせり
▲神階ハ貞観元年正月廿七日葛城一言主神に従
二位に叙せらる 三代実録 後古今集 そのくち葉
賀茂氏人 丈木集 遊事伝るとやへを望るとて一言わけ給ぞけつる 題昭
高天山 付高天寺

金剛山の北麓に石見関に周防あり
高天ハ山の物陽毎朝と鳴りて宿を梅と杨
ぶらとそり又太鼓蜂と名よいそれを梅と
岩穴芸せりて おきてられば出入ひよ穴の中

神柿を利驢号神活りて却て驢とけいへり 釈日本紀
万葉集 葛城乃宮の野原に高てあげら海殘いまゞ畧

高天彦神

仁明天皇嘉祥六年大和國葛上郡従三位高天彦
神社名神らに給ふ 續日本後紀

白鳥陵

或人曰葛城乃根よ白鳥の祠ありながら村乃際
一言る神ハそのよりよあり長庫村乃西
日本武尊東夷征ゆるがてくへり給ひ伊勢ゆ
能褒野 延喜式日本武尊陵在鈴鹿郡 ありて病
褒野陵うり葬ものし時白鳥ゆ化して大和ゆ
きく飛給ひしかハ群臣棺を開て見たまりよ
只明衣乃ありて又白鳥ハ大和ゆ琴弾原よりぐ

ゆらゆ飛給ひしかハそこに陵を作りて更よ白鳥乃
て河内ゆ舊都乃邑よりて飛給ひしより陵を作
りて白鳥乃三陵とゆ入り御ものよ池よりけり
給ひしかハ衣冠を蔡ものりり 日本紀 ゆちくり乃説
あり高度紀よハ尾張ゆ 大平記よハ尾張ゆ
よ飛給ひしかり白鳥乃鄙乃名ありとゆ入り威裏
紀よハ鷲ゆ白鳥乃明神と顕給ものあり
▲仲哀天皇の日本武尊乃子二乃法子ものて却ゆ
しに父王白鳥と化しけり給ふ朕ものめびなるよ
やむ附れしに只白鳥乃陵乃えんぐりの池よりひるんう
ものぞ見たくるぐさをるんと勅言ありしかハゆ
より白鳥をはぐけものりき 日本紀
▲仁德天皇六十年十月小白鳥陵ハりとり元し

とて陵守は役丁を宛給へり陵のうちうち伯廉
を化して立り給ひ九ぶにてあやくくしてとそれ
ぬ由して又陵守紙ぞと色給ひとある例 類聚 国史

琴弾山

澄月抄和田明日香紀に琴
国琴引の山いづれの中やとこゝに日本紀に琴
引の象大和国とかけるは一説あるべし

六帖

いたくふるさとの声の深ぬん琴引山の雲さこそ

高丘宮

帝王編年曰葛上郡柏原ヶ一言主社の不
人皇二代綏靖天皇元年正月都を葛城高宮廟 日本紀

続日本紀曰づら紀山の東の下なる宮墨上
より一言主神社いたらひなりつくり
皇極天皇元年蘇我大臣蝦蟇祖廟をづら紀の
高宮より立けるとなり 日本紀

葛城寺

村老ヶ村そのの沼あり
葛城寺又は妙安寺とも聖徳太子の建立の
蘇我葛木臣より給りけるを平氏伽藍なり
▲葛城尼寺の弥勒銅像八天平年中寺に祀あり
承安の頃の事なり
より盗人の沙勒の像をとりさりて鳳ぶ狂
より像声をとりて給ふまぞありなり 絵書

入寺記

室秋津嶋宮

古事紀曰葛城室秋津島宮帝王編年曰葛城上郡今掖上池上池南西中ゝ今の室村より乾ゝて川の東

人皇六代孝安天皇二年十月都城室地ようたさきく秋津嶋の文と名づけ給ひ紀日本 又葛城文ともいふ古事紀

掖上池

推古天皇二十一年この池築りとゝのへり日本紀

玉手丘上陵

孝安天皇の御陵ハ大和國葛上郡より延喜式 御宇百二十年正月ゝ葬御ありて給ひ紀日本

茅原村

茅原村の乾ゝて川の東

茅原村ハ後小角の誕生地なりとゝ八萬野郡よりあらん

掖上池心宮

村名ハ今の池所村なり茅原の南ゝて川の西帝王編年曰葛上郡古事紀曰葛城

掖上宮

人皇六代孝昭天皇元年都城掖上ようたしゝ由ゝて池心文と名づけ給ひ紀日本

孝昭天皇の掖上傳多山上陵ハ大和國葛上郡より延喜式 御年八十三年八月ゝ葬御ありて給ひて

孝安天皇廿八年八月よこの山陵ようてをさめ 日本紀

腋上嗅風岳

あがたぐうもうでくさひてあがたにうつる民

神武天皇廿一年四月天皇腋上嗅風岳にのぼり

給ひて西の方を臣の従兄弟あぐ〳〵国内を巡狩

ゆくに蜻蛉の臀咬の如くとくとくと宣しまして秋津嶋

名あり 臀は尻なり 咬は掌なり 西は嶺の方東は腋

の方南は夫は背なり 釈日本紀

雲梯社

雲梯社は倭国葛上郡にあり下照姫命天巳

貴命の妹味鉏高彦根神妹 舊事紀

捨篠社 号高鴨社なるべし

捨篠社は味鉏高彦根神倭国葛上郡に鴨の神

舊事紀 又大兼物部の剣 又は根の神の戸なるも山剣味鉏高彦根の神の常陸の剣なりは山剣大和国に鴨社

よりぬれる 釈日本紀

御幸の神の社 石寸

葛木御歳の神社 延喜大巳貴命児御年神なり 一宮記

▲神階貞観元年正月廿七日従一位をくわれり 三代実録

巨勢山

倭名類聚抄曰高市郡又葛城郡に葛上郡とあり

巨勢村高城上郡の西にありて高市郡の境なり

大寶元年幸の母秋九月太上天皇幸于紀伊

万葉集

巨勢山のつらつらしの木ぬ許の春雨を 坂門人足

見れども飽かぬ巨勢の春野かな 光仁

巨勢川

[illegible]

とあるうた

千五百番歌合

[illegible]

月清集

春ぬれば[illegible]

拾玉集

[illegible]

壬二

[illegible]

師兼千首

小初瀬の山[illegible]

[illegible]

子葉屋城

[illegible]

[illegible]

葛上郡神名帳十七座 延喜式

鴨都波八重事代主命神社二座

葛木御歳神社

多太神社

巨勢山口の神社

鴨山口の神社

葛木大重神社

大倉比賣神社

高鴨阿治須岐詫彦根命神社四座

葛木坐一言主神社

長柄の神社

葛木水分神社

大穴持神社

高天彦神社

和州舊跡畧考第十二卷終

和州舊跡畧考第十三卷

城上郡

磯城郡 日本紀 城郡 續日本紀 倭名類聚抄 延喜式 大安寺資財帳

元師社

鳥井ハ大道よりあり社頭ハ北向高殿ハ
元師社と天皇乃松天くだり給ふ乃時護
奇鏡ハ三面ゑ鈴一合と御才ゑそへ給ふ
それ一ツ乃鏡ハ天照大神乃御靈として天
隱神と佛名をあらめ一ツの鏡ハ天照大神
乃前佛靈として國懸神と佛名をあらめる
今紀伊國名草宮ゑあらやまひ大神
也一ツ乃鏡をゑ鈴と天皇御食津
神朝夕乃御食夜護日護奇事ゑ今奏

向ノ宍師の社より東ノ大神也 神日本紀

山陵

此所より十町ばかりの内より陵六七基ありて
中に俗ていふ墓とおぼしき
物又ふるき山ゆゑ中ほどなる
ありのいづまとわりちらさけまぼろのごとく
ちらしたり

崇神天皇陵

人皇十代崇神天皇八山邊道勾岡上陵 古事紀
山邊道上陵大和國城上郡にあり
延喜式 御宇六十八年十二月薨御なり治世百廿年
百廿歳 日本紀 又古事紀より十百六十八歳
延寶七年迄凡一千七百九年

景行天皇陵

人皇十二代景行天皇八山邊道上陵大和國城上
郡にあり 延喜式 御宇六十年十一月より近江國高
穴穂宮にて崩御なり治世百年百六歳又古
事紀に百卅七歳又正統録より百卅一歳と
あり成務天皇二年十一月より陵にあり
日本紀 延宝七年迄凡一千五百五十年
成務明天皇陵

御門天皇八御宇十三年九月より崩御なり治
世と皇極天皇元年十二月より高市郡の
滑谷岡にありて後同御宇二年
九月より押坂陵にあり墓所記押坂内
陵にあり 日本紀 大和國城上郡にあり 延喜式

撰集鈔通要ス此陵ハ添上郡内ニ有
ツヽ所ニ記シ侍ル

田村皇女墓

田村皇女ハ大和国城上郡舒明天皇陵ノ
内ニ葬ル 延喜式 敏達天皇ノ皇女糠手姫皇
女ニモト奉ツリキ

大伴皇女墓

大伴皇女ハ押坂陵大和国城上郡ニ有 延喜式

忍坂山

万葉 隠来ル長谷の山ハ青ハ乃忍坂山ハ色ハ
ツキ山乃お山ハ紅ハ乃ぞ
薄墨ハ俗国也 宗祇法師 忍坂ノ山
ヨリ

鏡女王墓

鏡女王ハ押坂陵大和国城上郡ニ有 延喜式
此国ヨリ北ニ十市ノ郡ニ有リ
ヲ城ノ郡ト云ヒ
ケリ

釜口寺 寺領百石

元興寺ノ大道ヨリ十又十町ヒガシ
集ル 道ニ山寺ヨリ
釜口山長岳寺金剛身院ト弘法大師ノ開
基也出書ニ云ヒ
此ヨリ西ヘ
小法師ヲ
道ニ
河国梨

なつくの世みはあらじゆきぞ積る

痛背川

水上は三痛山痛背山の麓なるゆゑ名なり北より流れ

万葉

世の中は何ともなけくたゆたびの痛背の川と流るるものを

同

痛背の川の絶ぬる時ゆきかへる人丸

壬二

桂の川のゆきの岩ぬ岩ぬきてあるゑ行波絶ぬ家隆

痛足山

万葉

化覚抄大和國に延喜式に穴師坐兵主神

纏向の痛足の山に雲ゐたなびけるかも

逸巻れ弁入

見むとは拾原に何人か来る

顕注密勘曰大和國にある山に桂の川の山ともいふとかく

桂の川あり桂の川とよぶ是なり又

二の山城にもあり

手ちはやきやうの山ちはやの嶽

拝山

をこの大和國の山の名しあり山も其あり

定師山の頂十市郡にあり城址あり

それ用ちに藤ちの山不尾桃尾の滝

のようなり

箸墓

大道の西れり俗に箸中の墳と

又別箸中村にあり

箸墓の墓の遍鰐し宗神天皇十年天皇姑

倭迹々日百襲姫命の大物主神のうひ

ひるが晝ハ見えず夜のみきたらせ給ひしに姫のみ
切にのたまふやう君常にいませども晝ハ見え給ハねバ
ねがはくハしばしとゞまりてうるはしき威儀をみえん事
を乞ふに大神我あした汝乃櫛笥に入らん爾
のかたちにおどろく事なかれと姫心乃うちにあや
しくおもひながら明るをまちて櫛笥をみれバ
遂にうるはしき小蛇あり其長さ衣乃紐のごとし則
おどろきさけぶ時大神忽に人乃形と成り
汝しのびずして我にはぢみせつ我又汝に
はぢみせんとて大虚をふみて御諸山にのぼり
給ふ姫いとくやしくおもひてついゐして陰
を箸につきて命終りけるに大市に葬す
かれ時の人箸乃墓とはいふなり其墓を晝

ハ人つくり夜ハ神つくれりと又書にありぬ是ハ
大坂山乃石をはこび山より墓に迄
人民相踵て手遞伝にて運びし時乃人うたひて日本紀
おほさかに 大坂 つぎのぼれる 築 いしむらを 石村
たごしにこさバ 手遞 こしがてむかも 不越 難越

緒環墓

大道乃東のかたにありけるよかくさだめかれおだまき
て緒環墓とハ聖墓の異にてむかしよ
緒環墓乃濫觴も大己貴神妻をまつりしゆゑ
と天羽車に乗りて靈窟をとき節陶津耳
おもひそめにし大陶祇乃むすめ活玉依姫よ通
ひけりひそかにその通路を人のしるべきよりもなく
妹女ちぢめて孕みけり父母あやしみて誰人の通ひ

来けるまや女神人あり屋上より西に向ひ
ものゝ
志のあまべ夢に玉奏よ針をとけその蒙すそを
さして行を志ひ行よ綸の元にあり節酒山
と称く吉野山よ入三諸山にてはりきそその
糸は三光おしまわ三諸山と号せり 舊事紀

纒向珠城宮

帝王編年曰此宮乃所ハ城上郡今の纒
向河の北乃里に西乃田中と云俗土地田
乃中と長者の屋敷と云ハ緒玉葬墓
宮はもり所りあり
纒向珠城宮ハ垂仁天皇三年十月更て纒
向よ都をけて行ひく珠城宮と云 日本紀
又師木玉垣宮 古事紀

長秋詠藻
まきの山に光乃宮に居ましけるとうよむ山に釣をそたる

珠城山

夫木
星入乃つゝみ乃ねの通てゝ西に乃山無宮ありよりり實伊

纒向山

万葉
痛足河山乃ひまてゝ行乃に流れ乃水乃人乃家に人丸
久安百首
巻向乃あの乃ゝの宮乃今ゝかもそ春秋待ん 柿本

巻向川

痛足川お川ゝたなびし
万葉
痛足川波ゝ乃月乃中擬我山乃雲もそゝし
同
黒玉乃夜さり来れば巻向乃川ゝ乃音乃ゝ人丸

檜原

痛足山乃南ゝて三諸山乃西よ行ぎ

万葉
まき向乃檜原にたてる春霞おほにしおもはゞなづみこめやも　人丸

雲葉
あさもすゞ河とはなれそめつゝん檜原の山の雪乃林葉　是性

同
行河乃過にし人の手をらねばうらぶれたてり三輪乃檜原ハ　人丸

纏向日代宮

帝王編年ニ城上郡今の巻向の桧村にし
纏向日代宮ハ景行天皇四年十一月泰浪國よ
り還幸ありて更に纏向を都とし給ひて日代
宮といふ　日本紀
同御宇五十八年二月近江の志
賀入りて三とせおはしまし是を高穴穂宮とい
ふ
香二
とふ人もなき花桧の檜原の宮乃秋乃夕暮　家隆

豊受氣太神御鎮座地

豊受氣太神ハ檜原よ御鎮座乃初より
不得ハ詳ならず書をまつべし

三輪山

痛足山乃南にあり
三輪　三室　神南火　同山也
神岳山ともいへり
神楽注秘抄目ニ三室と云ハ神ノ社也　詞林採葉抄

万葉
三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなんかくさふべしや

同
三諸つく三輪山見れバこもりくの泊瀬の檜原おもほゆるかも

同
みてぐらを奈良よりいでて水蓼穂積にいたり鳥網張坂手をすぎ石走る神南備山に朝宮につかへまつりてよしのへといりますみれバいにしへおもほゆ

又歌

同
月も日もかはりゆけども久に経る三諸の山の離宮地

同
神山乃山辺にまそ木綿短木綿かくのみ故に長くと思ひき

月

八隅知之我大君はしきいまさぬもしらしあをくもの
とひのぼらす神岳乃山の山の木ぬれをかも 畧

元真家集

久かたの八百日通よ立ぬれど三輪の山の古里ゆかしかりけり

敦忠家集

三輪山乃ひるがほの花の盛りやしまし

内裏名所

草根集

ひるがほのうつろひぬれば秋ぬれぬ

定家

秋ぬれぬ通ひそ通ひそ通ひ初し三輪の杉村

月

三むろ山とろちはつきとしをへぬ

長屋王

万葉

味酒乃三輪の祝の山てらす月乃ひかりは今しかもとも

いにしへ乃三輪の山てらす月乃ひかりは今しかもとも

崇神天皇乃御製 麻作潜 歌和紙

とあそばすらくとあさらしなさらしなきりの布をぬ

ぬきりの布をぬ細ぬ海ゆ出てくあちさゐ洗

倭乃国乃国を今ぬ神のたてまつる

ぬ月乃ひかりは今しかもとも

しぬさゝ作歌

神岳山

三輪山同山や神岳山 同山 同林 榊葉に点あり

倉神岳山部宿禰赤人作歌一首 并 短歌

万葉 三二

備乃神名備山は五百枝刺繁生たる榊葉乃樹乃弥継嗣尓

もやまひ迩ん あすもぬれなん京師 畧

及歌

月

月

月

月

月 香川乃川乃上乃高乃ありひすゝき高乃あり

神名備乃山乃榊とりもとをかくやしひ植ゑ畧

神山

神山乃下響乃水尾さしは後も吾妻

畧

澄月今安云は秋就和訓載二十三倫山
雖然後頼朝卿神山よまゆのぬさをひき
をくらすや花乃さかるるんと取詠
俗取万葉集然別若有神山之和訓乎
可易変〻後頼朝卿ハ文治三
年実永社乃歌合ニ見えたり

三垣山 付神遏山

万葉
三諸之神名備山ニ垣乎山ニ秋萩の妻
と寒く白雲の棚引来て聳視足日本の山
弦者令動喚立鳴毛 人丸

神遏山

神名備山右の所ニ在なるひと所あり澄月卿
抗回の神名備山や今梅沢の遏山可和訓乎

但祢南備山之俗名なり但先達所抗ハ
神名備山乎ハ祢辺山ニ〻神名備山就
又ハ異一件分云所ニ〻

三輪川

長谷川ハ所なれるり三輪川ハ作歌
波もこれ所なり三和川乃清流をきくにも
万葉 暮木去捨ゆくなり三和川乃清流をきくにも
壬二 三輪乃山川ハ山ゆ出来るのみなのけ出来流も 家隆

古今
万葉
三輪乃山杜繁ゆ成れ杜の枝のしなるうれも 仲臣
古今 春ハ来ぬ三輪乃山ハ花ぞ咲ける門 読人不知
永縁家集
三輪乃山ハ見て分ん春ハ来ぬ人ハ来ぬ
三輪乃山ハ花ぞ咲ける又ハ杜の枝をよめれ根源

むし伊勢國菴藝の郡より作りけり人保山に入て麻を作る狩より風吹あらきて地くずれて来りのあまを那くくして長高し目もてまれ河乃ごとくして猟師これを射あてつ血乃あとにつきくらべねいろに遥なる山中よりとうて山をて駐中に塚あり中ていまりそれ塚乃まへより赤女あらはして山猟師とまりくするもちうに箭をとりそすみより赤女おそるけれ地をくていりくめが射ちりけり赤女お塚よりとむ鬼やあられ鬼てらまて多来此塚よりありめは鬼と射ちるとべーといりてうべ笑めとうその塚れはよりくや火と付く焼ちりけりそのあ後此神女と見てあり又相伯寺三

よりて猟師寄さうぬ児一人をうあめりを時は男白地てあるを地けりそのまに女うせぬ泣の形乃ちたづの行ばけりまとうべ又児をうせぬよりくうるむしよは女常にあるりきる不と見るるよ三倍の山りる於てれ門とうきけりを見よるまくく大和國てふびねくく三倍乃山乃赤れ祭てりの祭女きすと祈り狩てを社乃伯戸をとて開てあるこの児を見ちりは男のくぎれ切なるうをみくうにちりひく赤てうまりとうとうれるとてその赤乃祭とを伊勢國あれ乃郡乃人たとこのみしそまるめ郡の祭とはりよりうる遠よ云鬼よ神ちるうとハこれなり 題註密勘

三輪神社

社領百七十四石九斗八升

一。名居。二。名わ。樓門。寶倉。拝殿。

あまてらす社頭を作る

當社ハ大神大物主神社神名帳舊事紀曰

大巳貴神社とやまとの国城上郡大三輪神

ハ嫡后ハ須勢理姫神と云く神光海をて

ゐてうつひ来るりのあり者あるむちの神とひ

さ丹ちく地ハ誰そやこうくゆ吾し見海を

幸魂奇魂なわ大巳貴神乃給ふ吾幸魂

奇魂とハ心ばくすのもみをんやこうくゆ吾日

本国の三諸山ゆ来ん中ゆ故ゆ約束を

かこたゆ為ゆ行ゆひき日本紀　又崇神天

皇七年倭迹々日百襲姫命ゆ大物主神

荒ぶ神ひく苦あり更ゆ市磯に部ハ見大物主

神なり我児太田々根ゆてゆ子をまつ

ゆ為ゆ為ゆ太田々根ゆ命を神主

とまつ先ひつ太田々根ゆ命ハ大三輪

君等が遠祖ゆ也ゆ茅乃葉を三ゆ分て是ハ

条れ日ゆて茅乃葉を至て三ゆ也ゆ

て里人ゆ為ゆ作ゆ為ゆ鳥百

ゆ為ゆ作ゆ為ゆ

ゆ為ゆ作ゆ為ゆ

乃ちひと去りて行てゆ也なり奥義抄

抑大巳貴神ハ日本紀曰素戔嗚尊奇稲

田姫ゆ逢合ゆて生ます児ゆ

古事記ハ一書ヨリ
已来ル所ノ古世
古事紀撿

須佐之男命

布波能母遲久奴須
深淵之水夜礼花
游義豆奴神

天之冬衣神

大國主神

亦名大穴牟遲神
亦名八千矛神
并有五名以上又大物
大國玉神 並八名 旧辰紀

一社陸奥国鎮元年二月
枚社
[illegible]
[illegible]
三輪若宮
若宮社ハ大田々根
[illegible]
大御輪寺
[illegible]
大御輪ハ慶国法
書十二奏ヨリ
又蕃仁天皇ノ御宇
[illegible]

十象ごとうまで常人にて御代舞持
も見さげりのある所情欲人ありくるを
をもかうけるさの神の法をよておそ〜まぢよ
しひ物ちにすりて大御物ちに世こしすこに
入定しの末代よ弟持とんせんして変板よ
市見の法をうこうの今よあるこのなり
太子伝ゑ探集抄　所ゑ三倍の神人奥よあり
天照太神御鎮座所
人皇十代崇神天皇の御宇五十四年大和三倍
山御宮蔵上よ宮法をうて二年治つをり九
の所を鉏入根命わが日足ぬ〜中き志のあの姪
倭比賣命と御技代と定〜天照太神と載

きりあくに移ぎ奉り　倭姫世紀

玄敏谷

南世甚ぢ〜てあり
玄賢僧都八　発心集　姓八弓削氏河内国人なり
歌書　山陽寺乃山寺を建き者ちこれどせと賦
人なりして交よちる代まぢりらとのまぢ三倍川の
ぢりに僧をうふりりをもとびてうんありひて
住きり植武帝乃市附ぢるきこうめて法よ也
おくれじ道づきかこうるくてなあ〜わにまいりに
名ちまでも物女意なるこびありひきるあや家良乃
こうどのぢせよ大僧都よぬ法をうと様しりとてあり
発心集　三倍川法花添よすぎそて弥神と又しきりこで
その度或所よ大ちの所あり渡ちりていまぜ〜と

まつのこずえかすみわたりて対面まことにありがたくおもひくらるるあるじ〇はるばる月日をへだていづちも物ぐるほしくまことにたのもしかりし　後心集

海柘榴市

初瀬より五十町小林逸抄　かるや村より宮所ゆばの柘榴市はたがきの市ともいふ　後拾遺抄　又はたがの柘榴市とも云ふ古歌とうしろ不分明柘榴市とも別所抄　又はたがいち大和名所記抄中に初瀬よりまつろへ人ゆかるべきはそこにありけり観音入法げあるやあんなかなり　拾遺抄　波くあるを長谷とそ聞くりとうんいでなま

ぶりでいちもりの所より宮所ゆかるべきにはけり心ちもせずいきつよりあり　畧　日くれぬるいそぎたちてあるあるべきもちてめいぞくいそぐせはやくいそもあしこしくて　畧　玉葛来よはやひこ

にそもそもまた初瀬へまゐるべしとて御ゆくさきよりて小右記曰

正暦元年九月八日長谷ゆまゐでに椿市

よりて御明灯心去年ごとに仏殿堂よまゐ

で風雨と候し布サ葛市明万灯くもせ

ぬ　林逸抄

家ゐ　万葉

海石榴市八十衢　同

三輪崎

三稚山の高丸尾さしたて長谷川をぐれ
佐野はれわらもこに住るや
万葉
くるくも峰来る雨の神之滝狭野
夫木
三稚の滝夕波立ぬ村雨の
佐野の渡り波高しこの声つるぶ 定家

佐野渡

佐野の舟橋又は佐野舟橋絶くるぶ
さとあるも上野国なり又佐野の里とも
拾遣愚草
は紀伊国佐野の渡は大和国なり 井蛙抄
弱とめて神うちつくしのもぎ
師兼千首
時雨降佐野の渡りの舟橋
草根
弱とめて紅葉やいそく未遠きちの河のよかう藤 正徹
源氏物語 夢大納言
三条乃くびのやどりに大納言
家門いとせばきやどりにくさのわたりにあるあれ
ものなれどさしてさびしうすまてくるこ
なり

磯城鳴金刺宮

根書日山遍磯城嶋磯城嶋宮 扶桑紀帝王編
年表光寺縁起等ハ山遍郡 玉林抄
云山遍郡ハ大和国遍也四ツ日本紀同遍都
倭国磯城郡磯城嶋仍号磯城嶋金
刺宮 玉林抄同今
敷島ハ磯城郡也
竹原あり其内ハ小社あり是欽明天
皇内裏乃跡也 玉林抄同世田畠あり
出ル名所

人皇廿代欽明天皇元年七月より都を倭國磯城郡磯城島に遷す〜磯城島金刺宮と名づけ給ひよ佛宮十三年始て仏法日本に渡る
よりうち世皆滅後凡一千五百一年の欽明天皇
元年より延寛七年迄凡一千百四十年の
磯城瑞籬宮
帝王編年に山邊郡に義磯城嶋金刺宮
宮とあるハ世わり詞林採葉曰磯城瑞籬
宮又磯城嶋金刺宮ともに磯城嶋と見て倭
もに磯城郡なるへし
人皇十代崇神天皇三年九月都を磯城に
うつし瑞籬宮と名づけ給ふ 日本紀
年迄凡一千七百七十八年

磯城嶋
詞林採葉曰磯城郡に大和國の内に名所
皇居し崇神天皇磯城嶋瑞籬宮
欽明天皇磯城嶋金刺宮也八雲抄
大和國
万葉 たまきはる倭國はいとぐ〜あれどもこゝはいとぐ〜
月清 たまきはる宮ゐしまの宮きゝ山ゐ昔とゝ〜愛やぐ〜 良經
壬二 たまきはる宮ゐしまの宮ゐ桂原も万代乃ぐ〜とあやぐ 家隆
磯城嶋高圓
高圓ハ三笠山乃東に龍
谷村に高圓山あり
新古 高圓や高き山ゐ光さしそふりて月 堀川院
後度撰 たまきはる倭や高圓山ゐ秋風ゐ吹きて倭や高き山ゐ

泊瀬山

八重がきの日瀬小泊瀬山やしいてらすみせ
山もゆるりの泊瀬又長谷 万葉

万葉
隠口泊瀬とあがるはつせ山 山王
同
隠口泊瀬はつせの山のゆきかよふ雲は妹にもあらん 允
同
隠口の泊瀬の道はうつくはしみ
同
泊瀬川長谷小国よ長延為 天皇寸興奥床
同
隠口 隠口 隠口 泊瀬 先達古詞
隠なりもの中よりかくれ流るゆゑ
むかしはあれありうれ江の上の相るゆゑ
うぐひすはいにしへよりの所詮所なしとしられにより

つく奥よりきかは竜口の初瀬よりふるうの
ものを 詞林 拾葉 大初瀬小初瀬もあり 上日
万葉
若の代も大きの世ゆの百敷柳百枝ぐもにうまひ
同
車之のもとの小初瀬山はつ菜に思ふ恋れ
同
海小松泊瀬はつせ山はつ菜の清うてらひ見ぐとぞする
海小松泊瀬はつせ山はつ菜の清うてらひ見ぐとぞする
清浦集
なにはがたみをつくしみるもとつ詞ハ近来あり
壬二
みはてうの花橘ぬ乃ぐ
同
物ゝ者よ泊ぐ川の初瀬山桜原も乃ぐ 家隆
亀山百七百首
僧の言や去ぐなるん初瀬山桜原も乃ぐ 同
草根
泊瀬

六帖　八雲御抄　泊瀬　初瀬同所

泊瀬小野に茂れる藤なみの思ひ過ぎがたき人の子ゆえ　恋人

同　かくれ泊瀬の山の山きりの思ひ過ぎがたき人の妹ゆえ　黒人

仰集　おほあれまさやまの波の白ゆふ花の咲くごとぞ思ふ　俊頼朝臣

木葉宮

色も初瀬はあわむ初瀬八重ようぶなりあまの人の子の隠相にして木葉山今は作れば銀杏色なりこれは二十巻の神社の宮所

うちなびく春の山辺　藻塩草

紅葉里

初瀬の石ゐるいとり　藻塩草　古源とりあえず

万葉　石葉の山のよあるもの事にや一枝あるこれ

拾玉　石葉の山のいそぐ時雨　家集

泊瀬川

泊瀬山もみぢの上ゆ落ちたぎつ　藤原清輔朝臣

はなぐれ行くみわ　同　林葉集

百瀬川の山あり　同　林葉集

小夜ふかぬ家初瀬なり故よ初瀬

やしろの形ぶ

万葉　泊瀬河白木綿花に落ちたぎつ

同　ちぐ波うきて流るる長谷川よるべ後れぬきくひき

古河野遇

二年の秋八一むらの

果て古河野の

万葉　いにしへ人の宮ゆ

京今　ちりぬるものの古河野の

玉葛集 二ゆ社の社のまちどをこがねすゝ吉野の里をみまやゆ
夫木 ゆ宮ゐ
同 ゆ川入吉野のゆきぶりに吉野の社
初瀬川入吉野の社
よゆせくあわきゆ弁ゆ近代の達者ゆ
初瀬山よりゆ社よりゆ
にゆゆゆゆ社ゆ
二ゆ社ゆ初瀬川よりあり

懐中抄 我有ゆ花ゆ大和国ゆ滝月寄枕ゆ初瀬ゆ
夫木 ゆ井ハ谷のゆ

題註寄助

宮山

万葉 足引の山河の瀬ゆなる月宮山ゆ人九
拾遺愚抄 初瀬のやゆ月ゆ下よゆ人ゆ
壬二 夕すぎ紀伊ゆ月宮ゆ桂月宮ゆ家隆

石村山

長谷ゆ石ゆ
ゆゆ
万葉 角障ゆ石村ゆ白ゆ
同 角障ゆ石村ゆ白ゆ
角障ゆ石村山ゆ白ゆ

長谷寺

寺領三百石

豊山神楽院長谷寺ハ縁起ゆ山ゆ
二の石あり一ゆ伯耆ゆ又ゆ長谷ゆ

十一面堂乃西ハ谷その西ハ畏のうへ法堂
あの色本長谷ちゆ也伯瀬乃川上の流れ権
現乃社ゑゆもわゆ天人ハ[illegible]川天あ
ゆ[illegible]と雷陸[illegible]なりて[illegible]にのぐりし時ハ
寶塔為てハ山乃入口ハ三神の里神川の瀬
ゆとぐまりゆと我内の宿神ゆ入りてゆぐ
ゆゆ行きなりて西小乃ゑに納まりゆ
舊名三神とあゆ[illegible]伯瀬豊山ゆ入り
三百余家と称ゆ[illegible]福寺ハ傳道明聖人
ゆれと石室ゆ行[illegible]ゆ[illegible]ゆ里の名ゆ
ゆぞゆ伯瀬ゆ[illegible]ゆ天武天皇勅ゆ
ぎゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ
ゆ行ゆ二ハ長谷寺又ハ長谷ゆ

ゆゆ（今の十一面堂ハ聖武天皇ハ勅願ゆて）德道
上人（釈書日法道仙人）法人ゆ[illegible]ゆて天平七乙亥年
五月十六日ゆ[illegible]て同十九丁亥ゆ
九月廿八日に供養せゆれ勅使八中納言奈
良麻呂道師ゆ天皇ハ傳基ゆ提呪師
ゆ大僧正行基傳百人（真福寺廿一人元興寺廿一人大安寺廿八人薬師寺法隆寺）
天附乃陽應縁起ゆ乃ゆ德道上人ハ
[illegible]國指宮ハ郡乃人姓ハ韋矢田部名ハ
米麻呂（或名君）天武天皇昇位ハ年二月
廿又日お[illegible]二十又[illegible]寺験記日神
亀三年十二月晦日大傳都ゆ住ハ
一観世音菩薩ゆ縁起ゆ德道上人ハ大師
道明大德のゆ[illegible]ゆ長谷の里

よりそうてあそこに霊木あり人あり
きたりしは法之人寺継神天皇即位十一丁
酉年 扶書曰 法の上人国を治郡三尾お
乃ち此谷に来りあづしあり本なり 摘木長十余丈 扶書曰橋木 志賀郡
大津浦 感裏記 郡波浦 よりこぎまりて七十余と称数
ろろひ大和国を市郡八本此里に小井国
やうの女あり名よりゆへにりて仏像と作りる
むと八本のちまりとおりに引よりこぎまりてさびし
て死ちりこの里に所余年と称数同国葛
下郡小治里長大和河孫法勢 扶書曰 大満 こりあり
十一面の像を作りたまふ同郡 高麻の里
扶書曰 城下郡高麻 ゆ引よりこりしかど大ろも死せりこの
所又十余年 扶書曰 八十年 と称る天智天皇即位

七戊辰年 城上郡 長谷の里 神河浦 扶書曰 葛下郡
袖河浦 より引抜まり又三十九年 扶書曰 廿二年 と称るの木
こぎまりてこりて不毎しの夫疫疫あびとい
事ありとる徳道上人 扶書曰 法華法師 老人あるわ
と作りてこれ霊木を里人ならひうをこりて
かぐも仏と作りたりたん報ずして十あまと称る
或 高麗あり東に寺に三乃燈あり 今三燈の岸 あり
三世利益と表もろなりの寺あり造仏
まづ作りて後ところのごとく養老 庚申年
二月より霊木と寺に寺に所在結び
て聖朝安穏藤氏繁昌乃至法界平等利益
十一面乃像と作りたまふ大悲の弘誓我願と
感ひとこれ本とのつづく仏とおのづから作りて

のりけ〜ひ〜まり元亨天皇即位六年七月廣
前后事れうまわあの事ていを入れ廣
り入まて世君官といのあるひあり
きりあや重人佛法興隆ありと心よ
后は事を元正天皇より養〜かさねて事義
天皇より養ひ赤亀元年三月二百宣下ありて
書稲三千束と賞俗料より給ひ給ひ
あひうのとえざり〜ばひ同六年正月八日かさりて
大和河内あ水数千年乃正税と給ひより佛衣
本れ加持ありを修ひ八道並律師なり三月あ
ぐる十一面観自在菩薩乃像をり給ふ長
二丈六尺巧匠八秋首文芸秋首す動なり天平
五癸酉年又月十八日開眼供養あり伽百口

奥福寺元興寺大安寺
西大寺法隆寺等十リ　導師ぞ行基菩薩呪願ハ
義選大徳なりけ供養ぬ年より異流あり板も
廿二年より神亀三年三月成就ぞ板書廿八
奉より赤亀元年成就ぞ板日赤亀三年三
月成就ぞ導師ぞ呪願師ぞ
一同石坐縁起より天平元己巳年八月十五日の板
陽廻ありとのつ〜て金剛寶石ぞ
てかよあ〜ぞ八尺のて長師ぞ元あり
像ぞ日長ぞえりなのぞ世ぞ〜ぞ板ぞ十一面
乃像ぞ長ぞ〜ぞ
あり一枝ハ三れなり一枝ぞ麻伽陀國佛正覚の
寶石なり一枝ハ補陀洛山大悲乃生石ぞけり
とぞけ寶石ぞ尤脇ぞ珍元あり事ぞ独陀ぞ

一奥院南寺験記より一條院の時寛弘春日
乃社司より伝聞といふものあり 正頼中臣信清男三国傳記同之
地獄所といふる瘡を
ひたりけるはいくほどもなくして愈ぬるにた
まりて建立せりと
一再興し長谷寺験記より縁起和尚乃書の
谷寺奥上を録せ
一東とえうり来りあはせたるあはせ
一人皇六十一代朱雀院天慶七年正月九日奥
上大悲の像をうつせり
仏乃出ては後の山に
おり 験記 前東寺長者記録

一人皇六十六代一條院正暦二年三月三日法堂
奥上観音堂に
一人皇六十八代後一條院万寿二年正月廿七日
観音堂の底乃
に消ぬ 験記
一人皇七十八代後冷泉院永承七年八月廿五日
奥上頂上仏乃面八桐の枝葉の中より
ちらひ也 験記 同十月造仏乃時の仏面と彩
中に納る彩料漆
奉加為の料八皇后宮職内親王
仏面なり 宰附
供養あり 講師法勢大僧正 呪願八権少
僧都田縁 読師八摂少僧都長守 慈鎮録

一人皇七十三代堀河院嘉保元年十一月十三日
炎上す頂上仏乃御手灰燼の中より出給ひ
き（験記）承徳年中に観音堂昇廊中門等
焼ありしかども火のたびごとに本尊を
のがれ給ふ又天永元年供養なり　慈鎮録

一人皇八十四代順徳院建保七年二月十九日
炎上同御宇承久元年四月十七日より五月
廿日迄に観音の像をつくる仏師ハ法
眼快慶（号安阿弥陀仏）はじめ灰燼の中におゐて給ひし
仏頭を面の左右掌をあはせ納奉るべく
宝座の上に安置す其後も仏身中に安奉
まつり眉間の髄の内に招提寺の舎利一
粒をこめまいらす法阿弥陀仏不打の舎利也　慈鎮録

一仁明天皇承和十四年長谷寺定額となされて
先師の（続日本後紀）又貞観十八年長朗法橋上人乃
奏しきりによつて毎年安居に家勝仁王経
安部を講演して鎮護国家をいのるべしとの
宣旨あり　三代実録

一長谷寺の観音菩薩ハ仏者おぼしめしける霊験
とゐのりてあゆみ来りて[illegible]又むかしハ右近が法
も市にて[illegible]ひ又馬なまじ人の義女とも
なりけるなれバかぞへなまじかぎりもなし[illegible]吉備
大臣の野馬台の文をよみたまひし読よ[illegible]
書にのせられけるや或ハたしかならずといへり

験記に元慶五年三月大和国十市郡土師の

護法吾神

時移りて比叡の二刻ばかり息絶えて後
きかえりて家人に向ひ頭支人等ありて後の
山まうして護法善神となんと志のあり
まうやうとうとうとうとひけるとぞ錄構社集社編
乃社これなり

白山權現

越前国永平寺の河岡梨行四とゝ申あり加賀
国白山にまうでらるゝ甲斐国八代郡にまう
でゝきつる男に權現乘うつりて白
髭山に鎮坐せんと神託あり又一鏡あり
是を河岡梨乃社神に授けたまはれなり天
禄二年七月一日午刻鎮まりたまふ
神り同八月三日に社をうつしなれ 観音堂ノ西北ノ隅

[illegible]長谷乃[illegible]は大[illegible]なるもの也 三国伝記

山口神

長谷乃町の内にあり
験記曰手力雄命也延喜式曰長谷山口坐神 三国伝記見祥

與喜山天神

又三燈嵩山鎮座し朱雀院御宇
與喜山天神の山鎮座し朱雀院御宇
大和国長谷にまうでゝ神殿大夫武麻呂として
一生不犯酒肉之辛と新しき寺に住
類行と宗とせり俗あり名天慶九年九月
十八日武麻呂觀音堂に風雨ありけるとぞ
をりに特衣裳来入来りて我は光大威
験乃神なりこの山に住して大聖に値遇

くまり所にて指せて居たりと知られたり爰に
さきよりその月日見西山のようなる人
来りて作りし西山大川の下武麻呂が家の前
に六十計り乃家倍物衣装来りて石上に腰を
掛けて有りし爰に見て人なりしかも一町も
離れたるのみにて過ぎて川に沿ひ旅離れ
て休みたる道にて武麻呂家より出るを中ら
来りたるなりけるが大路掃坂とものぞ
掃きしび直に小路ぞのわ〜せの武麻呂通
明上人の廟所前にて進付三寸と見て勤まり
そしまち出雲よりまで行ひかや〜去り念誦
ありを聞て出雲に帰りたる云ふ〜客倍
に御自分の廟より雲晴く倍家倍亦〜見右

大良正二位天満天神菅原の基廟の山の麓を
去めて大宰に値遇して苦を通るに見
物見権現まりて多むかりしに山の地も
少しくこの川より居せりしより生れ今よ
り後ろ〜山の地まで所〜くよき所なり神幻
曼陀羅峯とも飛うり給へし二神乃出あり武麻呂
乃びく中作るぞうよ所の祠まりて
まりて聖喜山乃天神とぞ生りし義
天暦二年七月武麻呂宝殿を建て祠を
造り（三国伝道記）天暦二年より延宝七年まで九
七百廿二年の
一祭礼の儀式先大何の所なる初まり（今熱門前也）

是武麻呂の家なり次て大路の西辺より
して居をあり（今橋瓜与喜村）寛八拾雖とも拾の不ならず
道明上人乃庵室の前なるべく此佐と云る（今二王門内）
是三寸とすべきなり不可過ばなるべし
假社して居をもって一条院此宮勅願
て藤原京斎よ詔くに仕堂とうつし
高く天神新向乃跡をあとし椙坂乃道を
あらためて直道を行今乃参詣也（三国伝通記験記）
天神御勝とうけ世給よ石し長谷寺
町の東新の北よあり武麻呂の家地八町
新乃民屋より道明上人の墳又東
よ三寸とすべ二寸門の内よ今はなし
別院長勝寺（当世ろのちの）

験記曰寛平天皇勅願義福門院の修造なり
醍醐天皇ゆきて春宮よわらせ給ひける時御
不縁此所あり仁ゆ所にて安平寺
せ給ひ八大観音像三十三身の像と宮
造あり二本乃二本乃椙元得もに此所なる
所也此所をうせ給ひ達立なり也（三国伝記）

蓮華院

當世ゆ願所のあり蓮華谷とあり是
験記曰蓮華谷よ此あり二丈一尺ありて
役小角勒行乃窟御よむ也ゆ十羅刹女
あり上ゆ御ゆ霊場あまたあり
行仏上人乃此ゆ見こと又密法相應にして
聖徳鎮護ゆ寺号とあり二丈六尺玄

寺新の四堂と立てく万億莊嚴の極像とを
造りて天平十五年三月廿又日より佐養比神
護二年正月六日石川朝臣豊成の勅して
九四堂乃上に三乃正面乃堂とうちおねども
今は神護京雲元年九月十日宣下ありて
蓮華院とうのきくむく天人おまくり
て蓮華とすぐ大悲ていの瑞應に
ものなりそれより〜て聖武天皇の勅願
こゆうこと九月十八日〜蓮華院養〜めせ
給ひし

安養院　歳世の院の

験記曰行仁上人ちの道隆中納言の息にして
悪人院乃僧都の弟子也永承七年の秋の
ちよまうで〜菩提心といのる安養世界史定

往生の瑞夢とうちうち又観音の告にすりく勅院
進寄ものりて他洞乃所にて奏〜まあ白
川法皇勅して一乃正面乃堂又一院と造営
まり〜て元せの人安養院と号し生涯業
足して保安元年九月十五日乃夕方に
よむひく往生八十九

藤井坊　この坊ものひ

永享年中十一月中旬の比南都成就院法橋
信賢人とものひく長谷ちて一七日系舞せし
ゆ藤井坊といふ坊すて法華中〜
長谷寺仏前卒首
夕付ものやひぐきの下嘉も来て高あそれ山風　正徹

験記曰今乃二ま堂の内ものり

泊瀬朝倉宮

帝王編年に城上の郡磐坂谷の西
世に長谷という道ぐちの西にあり
人皇廿一代安康天皇三年泊瀬朝倉に
とうぐうあり 日本紀 延寛七年辰の一千二
百廿四年の

泊瀬列城宮

帝王編年に城上郡に長谷より
十町ばかり西にお雲村と云ふ
人皇廿六代武烈天皇元年泊瀬列城にて
即位まします 日本紀
延寛七年辰の一千百八十一年

泊瀬斎宮

天武天皇白鳳二年に月大来皇女を天照
大神にまゐらせ泊瀬斎宮にいらせて同三
年十月に伊勢の神宮にまゐらせ給ふ 日本紀
延寛七年辰の一千八年の

迹驚淵

天武天皇白鳳八年八月泊瀬に行幸あり
て迹驚淵に上りて京あり給ふ 日本紀

泊瀬小野

雄略天皇六年二月泊瀬の小野に行幸
あり山野を乃けきとめで給ひ
日本紀 くりくの岡 今時也 泊瀬の山にまします也
ふ給ひ中山にあやにくらくあり
あやにくらくあり 後 祭也

この郡より道乃小野とぞいひける

伊豆加志本

南世俗ていむり天照大神とそ世俗
ひろ名居乃沿たりて長谷の町乃うちに
南民屋の内より礎二ありあり
儀城嶽とす里坤より希のこ称す伊豆毛村
八十町なり堺あり伊豆加志本の名ゐ
乃沿より始りうんり
人皇十代崇神天皇宇十三年天照大神大和
国伊豆加志本の宮に遷り給ひて八年いて
ひなり給ふ 倭姫世紀 儀城巌檀之本 葛木宝山記
かなり

狭井神社

三輪の社二町ばかり北より南世俗黒
田城上郡鎮花乃祭これ形
狭井神ハ大巳貴荒魂也花菊の付疫神分
散ありてわさとを人民をとゞめ給
ゆるれハ鎮花祭あり字多の天皇寛平九
年三月七日勅して神祭り給ふ旧記延
喜式ハ狭井坐大神荒魂社五座なり

竹豆山

薬師堂に大和国中しなく
万葉 五百ばかりなる竹山人まさきくあれとぞ 麻呂
竹林寺

笠山なり竹なる笠荒神といふ
鶯谷山竹林ちゆむり役小角行ひあり

霊山寺より器物長畏三蔵来朝の時天竺より
うけ中務まて天くうの所造の仏を
將来ありくけ山より法こ[illegible]せ[illegible]ひ[illegible]ま[illegible]ち仏山
乃名あわうの仏霊窟[illegible]て南世よりの
一荒神を良弁僧正糸縒の時荒神現形
ゆ人僧正小板より扁せてくれきを法大師の
扁乃像をうつす荒神をそなへ[illegible]
なぐさ寺にてくを作[illegible]抑大和國豆山の荒神
も三座おりまして太祖神一座 澳津彦命一座
澳津姫神一座 舊事紀曰太手神天和加迦流
義豆姫と書とうめ市ゆ澳津彦神與津
姫命此二神へ諸人竈神より祠をる神也

城上郡神名帳三十五座 延喜式

大神大物主神社
穴師坐兵主神社
他田坐天照御魂神社
狭井坐天神荒魂神社五座
長谷山口坐神社
殖栗神社
水口神社
素田神社
玉列神社
綱越神社
穴師大兵主神社
墻倉神社
宗像神社三座

神坐日向神社
巻向坐若御魂神社
志貴御縣坐神社
忍坂坐生根神社
等弥神社
忍坂山口坐神社
桑内神社
宇太依田神社
伊射奈岐神社
稔代神社
若櫻神社
高屋安倍神社三座

和州舊跡畫考第十三卷終